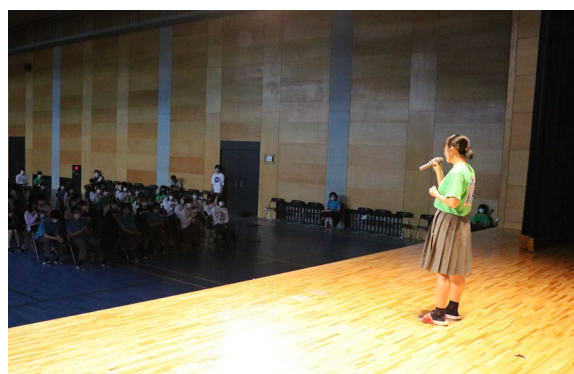


6月20日(日)、文化祭が行われました。県に発出された緊急事態宣言の最終日、保護者や一般等の来校者を迎えず、在校生のみでの開催となりました。これまでの文化祭と大きく違ったのは、生徒が前面に出て運営されたこと。その中でも“有志ステージ発表”は生徒の自主性を問うものでした。右はソロでの歌を披露した高校2年の女子生徒。この生徒はオーディション締切が過ぎて出演申し出を嘆願したそうですが、中学生のとき、高校の文化祭では「絶対に歌いたい」と誓っていたのだそうです。どうやらその意気込みが聴く人を魅了しました。とても素敵な歌唱でした。

いくつかの規制があったものの、すべての場面で生徒の成長が感じられた、学校創立80周年に相応しい文化祭でした。



教師の役割・・・

文化祭を終えた翌々日(翌日は代休日)の朝、いつも通り校門で生徒と挨拶を交わしていると、「先生、文化祭、ありがとうございました」と何人かの生徒がお礼の声をかけてくれました。また、その日校長室を訪ねて来た生徒もいました。準備から当日まで、ある程度納得のいく取り組みができた生徒は満足感に浸れたという気持ちが言葉になったのでしょうか。

今年度の文化祭は、生徒自治会が中心となり生徒主体の文化祭を作り上げようというのが文化祭運営の柱でした。コロナ禍の中、感染対策に注意を払いながらどの程度生徒の主体性を引き出すことができるのか、我々教員の課題であり、挑戦でもありました。が、当然の如くその方向性に温度差が生じます。限られた時間で成果を上げられるのか、生徒の満足感を得られるのか、などの懸念は拭えません。それは、生徒の主体性を引き出すためにはそれ相当の労力が伴うという教員の想いが抵抗感になっていることも一因でしょう。しかし、我々は特別活動、主に行事を通じて心が磨かれ、鍛えられることを体験的に知っています。だから教師の道を選んだ、といっても過言ではありません。諸行事には人間形成の魔力が存在していると言ってもいいのです。このような意味において今回の文化祭は、多面的な気付きをもたらした画期的な行事だったと振り返ります。

さて、将来に向けて生徒にどんな力をつけさせるべきかという問いを与えられたとき、私はこれまでの経験を踏まえ、「人と繋がる力」であり、「人と関わりながら生きていく力」、すなわち「生きる力」だと答えるでしょう。そのためには、我々は何をなすべきなのか。基本は、「教える、支える、

認める」ことだと思います。生徒の学びたいという知的欲求を満たすこと、生徒が社会で通用するためのメタ認知を高めること、生徒の内面的成長に不可欠な承認欲求に応えることなどを通じて、継続的、漸進的に生徒に向き合っていかなければなりません。「生きる力」の育成のため自己実現への筋道を描けるように、その力を身につけさせなければならないのです。

今年度、本校では“学校改革”に取り組んでいます。その中の一つのセクションで、本校が「めざす教師像」の策定中です。概ね「生徒の成長のために、共に学び続ける先生」を前提にし、その根底には、教師としての高い使命感と倫理観、旺盛な向上心と謙虚な姿勢が必要であることの共有をしようと整えています。そうした意味において、このたびの文化祭運営は我々に一石を投じました。続く今後の学校行事において、好機到来として臨むのみです。生徒の成長を願って。

「チンチン電車と女学生2021」

文化祭(前々日)での演劇部の発表でした。
「1945(昭和20)年、戦争に行った男の人たちに代わって、15歳ぐらいの女の子たちが電車を運転していたことがありました。私たちの協創高校は、当時、実践女学校という名前でしたが、8月6日、その女の子たちが避難した場所が実践女学校だったのです。今日のお芝居は、その女の子たちを描いた作品です」という挨拶から舞台の幕が上がりました。30分という限られた時間で当時の様子、被爆2日後に電車が運行されたという事実などを演じきっていました。心惹きつけるに十分なものでした。学校開校80周年を記念する舞台ではなかったかと思いました。